

LEONTODO



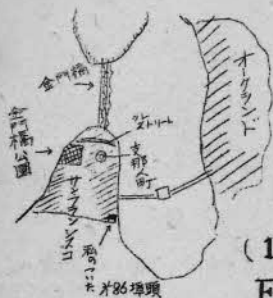
1953
MARTO

N-ro 5

ENHAVO

アメリカ航海の思い出	高橋達治	2P
ぐち-やら-がんもう-やら	山本昭二郎	5P
おもいで -----	アリマヨシハル	8P
Ĉu esp-isto povas esti kontraŭa al ESPERANTO ?	el Heroldo de ESP.	9P
録星の歴史	朝日賀昇	11P
Vulpo sendita de Dio	阪坂圭治	12P
合成語の単語化	千葉三郎	16P
Roko ĈARANKE.		17P
Murmuro en iu tago	YASUKO KAYAMA	18P
Historio de Unu Patrino の研究	花園元太郎	22P
Muĝo	HAYASAKA-Motoi	32P
サッポロ犬より	アリマヨシハル	33P
Postskribo -----		

カトは 在東京の samideano, s-ro Cukahara-Seiichi
が提供してくれた。



アメリカ航海の 思い出

(日記から)

高橋達治

(1)

F-ino H.Wolff

シスコ入港作業が終わって室に帰ったとき、僕は一通の手紙を受取った。ロスアンゼルス
のエスベランタスト、J. シエラー氏が僕の日本出発前に出した手紙に対する返事である。僕は全く
欣喜雀躍の態でその封をひらいた。すると中に封筒一枚(返信用)が附が1ドル入っている。

親愛なる同志 高橋君

私は君の11月23日付の手紙を受取りました。それによると君は12月13日にロス港
に到着するのですね。その日の晩、私は君の到着を祝ってザメンホフ誕生祭を祝うことと
なして居ります。ですから、その土曜日(13日)、君が到着の食会に間に合ふやうに早く私の家
においでになることを希望致します。

それが出来なくとも、どうぞ私の家で泊りなさい。きっと他の同志も君を迎えることを
望むでせう。けれども私は君がどれだけの期間交通の町に居るのかを知りたいのです。私は
はそれによって若干準備も致しますから。理々同志はやつてくれるのですが、どれだけの期
間にいるかわからないものですから準備も出来ないでしまうのです。

サン・ペドロ駅から街の中心までくる「赤電車」があります。恐らく君の船はその駅の近
くにつくでせうが、港町にある駅に始からゆくためにはハイヤーをつかかねばならないで
せう。どの電車にサン・ペドロから乗るか分りましたら、すぐにロスの利に電話して下さい。
(015103番です) そうすれば私は、君が1時間十分も乗車して来た時に聞かぬやうに、
ロスの駅で待っているでせう。ロスの駅から10分後にはホリウッ드의私の家に着くこと
になります。

けれどもシメールズ・シヨメッテアさん一家(一家中が家庭ではエスベラントだけで話
します)が君の船まで行って待つて下さると思います。困ったことに船の到着時刻がわから
ないために一日中待たねばならぬことになりかねません。私はロスでいろいろ知るよう
にしようとしますが、サンフランシスコでできるだけ利に知らせして下さい。しかし、誰も船に行か
なかつたら、必ず事前にのべたようにして下さい。

サンフランシスコに着いたらすぐ使うことが出来るように航空郵便封筒と、それから金を

【ドル
七人が
百のに
す。
誰も親

熱いもの
かな心づく
て、異郷に
何よりも
に記したの
をかけること
まして旅子の
12日、夜
でもけいウ
埠頭上屋の中
で、電話を
で半露室内の電
ろうというこ
うドイツ諷風
ているやうに僕
いのに、斯うして
好きなことを
僕は従自身で
かというので、
ら、"You are c
内回は彼から買
故、僕がサンフ
るかと尋ねたの
議論をした。酒
時間も彼等の議
朝霧がはれると、
ゆきたいと思
し、ゴアアの荷
等航海士を深
トリートはど
つたが、Klei
別して女が
てくれ自動車は日本

1ドルに上げておきます。お金は、君の船で米貨を賣らないという存案があるかも知れませんが、電報賃が58セント、パス賃が15セントです。サン・ペドロから電話をかけるのにお金を揚うことができぬときは Reverse the charge といえばよいのです。ショメッテーさんの電話は CR57890 ですが、それは私が家に居なかつたり、彼も船に未なかつたりしたときにかけることです。

心から 君の ヨセフ・R. シェラー

熱いものが胸の底からこみあげてくるのを感じた。何という厚い愛情であらう。何というこまかな心づくしであらう。偉大な言語エスマラント。それは究も、一片の木片の岸に漂う如くにして、冥途に流れた僕にさえ、斯く、大きな人生の歓喜を与えるものであつた。

何よりも重大な事は、氏が13日に僕を終日まつというのであつた。僕が13日到着と手紙に記したのに、船の運航は予定より遅れ、15日ロス到着となつたのだから。最も早い道は電話をかけることであつた。けれども僕は日本に居るときでも電話をかけるのが嫌ひであつたのに、まして旅子のつらぬアメリカなどで、自信のない言葉で電話することは臆怖であつた。しかも、12日、夜の間を歩いて、適当な市外電話をかけるところを見出せなかつたので、僕はどうしても「ウォルフ」さんに此を依頼しなければならぬと思つた。

埠頭上屋の中に事務室があり、そのそばに電話室がある。僕がそれに近づくや事務室が空で来て、電話なら私がかけてやる、というので黒紙電話をませてよろしく頼む。彼がよくお礼を取次で事務室内の電話から、僕はすぐに「H. ウォルフ」さんの声を聞くことが出来た。明日会えるであらうということにシェラー氏に伝えてほしいこと、いろいろ話した。時々大きく、Ja! というドイツ訃風な発音が入るのでちよつと噛喰つた。けれども何という楽しさであらう。傍に立っている事務室の僕が笑い乍らしゃべる旅子をおもて、にこにこしている。だが私達は何の一面顔もないのに、斯うして久しぶりに今う返還のように語り、そしてロスまで電話をかけてくれなどと勝手なことを頼むのだ。"Gras, revido!" (さようなら) といつて電話をきつてから、僕は従自身でそのことを不思議に思つた程である。事務室が別れるときに郵便船入川の反逆はないかというので、船に帰つて探して見せよう、壮気なレド・クリスマスガード(日本の)をやつたら、"You are clever, boy." (お前は賢い) といつてほめてくれた。厚いでながらとシゴ業内回は放ち買つたのだが、この時事務室にいた海舟のみのステベが二人僕等に話しかけた。それ故、僕はサンフランシスコについて、三回聞いた後、サンペドロからホリウッドまで来たけあるかと尋ねたのだが、一人が七十哩だと答え、一人が八十哩だと答え、そのために一時以上の議論をした。酒を飲んだ上だと事務室が言つたが、アメリカ人の気質を不すのに十分であらう。一時間も彼等の議論をきいて息を吐いたが快かつた。

刺傷がはれると、13日の事はかなりすつきりとしたものだつた。「H. ウォルフ」様のところにおきたいと思つたので朝から強着かなつたのだが漸く晴れ上ると穴も痛もたまらなくなる。但し、ゴアラの荷役中で忙しい船長のことを考えるとやはり具合が悪かつた。折も折である、一筆船長を深めているステベ風の男がいたから彼を案内してやつたのだが、その際、Clay ストリートはどこかと聞いた(僕は Kurei Strivit と書きたらしい) 最初はわからぬ旅子であつたが、Klei ストリートならあとでハイヤーで連れていつてやるというのですつきり着んだ。別してみなりがすばらしい。しか、地位の高さを示すという人でもないが、この人が僕を乗せてくれた自動車は日本では最優秀の部類に属するものであつた。才三大通りから、エンバカデル



通りに横けて、フェリー(運送船)の取の近くで、彼は、ここがグレー街から降りてゆけというのだが、その時の英語が幾分難に落ちず、彼女の家は近いのかと問いたら、私は忙しいから他のハイヤーで真直にこのストリートを上つてゆけという。仕方なしに下りようとしたら、彼は再び思い直したように自動車も動かさず坂を上つていった。線道にも人があつてその起伏をする毎にエンジンの哀なる自動車では僕の体が宙に浮くようでよい気分はしなかつた。まだ彼女の家がわからないこと、彼女とうまく応得できるかという不安、それに、この街路はシスコを東西に連ねる街路で非常に狭く、僕のためにトラブルされたこの人の不快を考えると僕も幾分不快の念におそわれた。I am sorry

というが、全く風の毒で居た。やがて290の番地ブルックにまで、壁に注意していること、白い壁のアパート風の家があつて2940から僕の探している2944までの数字が黒く、かなり大きくかかれていた。自動車はとまる。雑音のする間もなく自動車は動き、僕は彼女の家の前に立つた。すぐ玄関の傍の部屋からバイオリンの音が聞えていた。横のボれたベルでいそいそと玄関に招かれ、ドアを叩いてくれた。そつぱり肥えたお婆さんがBonam Tagom...と叫んで僕の手をとつた。ウオルフさんだ。続いて「グッド・モーニング」と挨拶した女の人、彼女の妹だと紹介された。「Mi estas tre goja. vidi vin. — (お目にかかれて幸いです)と叫ぶ。ハウドニドウと評価しながら、握手しながらも僕は、その一瞬の彼女等のほろ又みによって、今まで種いかくされていたアメリカ人と日本人、という対立観念が完全に消えざらぬ。忽ち一足とびにお婆さんかんなせの前に立つたような親近感を感してしまつた。彼女のエスベラント經理は紹介さるゝものらしい。1940年の世界エスベラント大会に出席したという。その時のサインブックを見せてくれた。外人の書いたサインの又字などというものはわからないものである。唯、日本人宮本新治氏の書いたサインは日本人の僕にはわかり易かつた。サインをしるというので、宮本新治氏の次の頁に感謝の一語を添へ、その次にMi kredas gloron de D-ro Zam-f. per vi! antaŭ raskiĝitagon de Zamenhof '52 (私はあなたによつてザメンホフの偉大を信ずる。1952年ザメンホフ誕生祭前日)と話しておいた。

彼女はエスベラントの教師を、それから彼女の妹は音楽教師をやつて生活しているらしい。彼女の部屋は二つあり、一つは姉の室、一つは妹の室、他はパントリか何かになっているらしい。この室は私の寢室で、書斎で、食堂で、居室である、という、そういえば僕が入つてきたときに、ちよつとそこで待てといつてその室を寢室から応接室に切り換へるために大急ぎでしく働かされたようである。やはり、Ja! と大声でいわれることと、rの発音が僕等日本人の管見と違ふというところで少々困つたが、大抵の意味は通じ、彼女のユーモラスな態度が僕の心を軽快にして僕達は互いに語り愉快だった。僕が余り大声で笑うので隣の音楽教室から文句が出てしまった。それで私達は街と公園を見物にゆくことにした。

晴れて暖かであつた。ウオルフ嬢は、時々道端で遊ぶ子供達に愛嬌をふりまいたりしながら愉快そうに歩いた。カリフォルニヤストリートの街角でケーブルの奏るのを待った。私達は愉快そうに話をしていると、美しい妙齡の婦人がげげんな面持で私を見て、それをウオルフ嬢はのがさず「あ、お婆さん。この人は日本人で昨日ここに着いたのですよ。私達はエスベラントで話しているのです。」ウオルフ嬢の胸の線屋鼻はこの時カリフォルニヤの太陽に映じて輝くばかりであつた。僕が姉に挨拶し話しかけると、Jes... のかわりに極端に上品に「はい」と答へる。横腹腹に狂んできたことがあつたのだそうである。もつ少し話したいと思つたがケーブルが来た。ケーブル・カーは、この町独特のものである。坂が多く、普通電車でゆつたか動かない。

私がユ
月虎と会っ
びに即座に
てきた。そ
まり、四年
するので三
ることは比
ないし、記
私にも意を
きたといふ
ひけをとら
エスベラ
母がきかれ
自分の考え
つた時、相
てやつてき
ラント笑は
る。つまり、
情操に到るま
一流のエスベ
は差当りの文
に勉強してい
めて少ない
しい。読むこ
からつきしだ
人間のほとん
どくしやくと
残念なことで
はない。私はそ
作又は模倣な
ていやだったか
なぶらうにして



ぐち-やら-がんもう-やら

S. YAMAMOTO.

私がエスペラントを知り、その学習をはじめたからもう4年にもなる。私は月売と会って種々「エスペラントを何年おやりですか?。ときかれるが、そのたびに即答出来ず、指を折っては、三年かな? 四年かな? と自覚のない返事をしてきた。そんなあいまいな返事をする気持は案外きまりわるいものもあるらしい。つまり、四年間も学習してきて、みっちり一年間やつた程度も覚えていない様な気がするので三年位と割引して答えておく。才能ある人にはエスペラントをマスターすることは比較的容易なのだろうが、私の場合、別にそれらしい才能など自覚されないし、記憶力もさしたる事はない方だから萬事に無理は出来ないのである。でも、私にも意を強く出来ることだつてある。たとへば、まかりなりにも四年間続けてきたということ、つまり、この四年間の実績が、一年間で私を凌駕する様な人達にむけをとらせないだけのあるものを私にももたらしてくれたということである。

エスペランティスト達にエスペラントの魅力はどこか、ときいたら、いろいろな返事がきかれるにちがいない。私がアンゲートされたら私はこう答えるだろう。「自分の考えを自分の表現でかけるから」。四年前、私がエスペラントを学ぼうと思った時、私はそこに魅力をかんだ。そして今でもそれは変わらない。でも、こうしてやつてきてみると、私が大分悪いちがいをしていたこともすくなくない。エスペラント又は、やはり、外国人(ヨーロッパ人)に分ることが第一の要諦とされている。つまり、あちら風の考え方、書き方が必要なので、西洋の風俗、習慣、感情、情緒に到るまでを熟知していなくては、まづ完全な文章は書けないのである。ただ一流のエスペランティスト達のスタイルの模倣によつてのみ比較的初学者である私達は差当りの文章を書くことが出来るのである。今から5年前、私は英語を懸命に勉強していた。その頃使っていた参考書に「日本人で英文を自由に書ける者は極めて少ない」とあって、とても私をおどろかした。たしかに私達に書くことは難かしい。読むことや聞くことはかなりの程度出来ても、書くことや話すこととなるとからつきしだめなのである。八千萬もの人間のうちの、小学校卒業以上の教育ある人間のほとんどが、過去、或は現在、英語の教育をうけ、またうけつつありながら、どくしやくとした模倣又はしか書けない、(或は全然書けない)ということは何という残念なことである。どうせ勉強するからには書ける様にならなくちよはんものではない。私はそう思って英文も勉強した。ところがどゆ作文の本にも、模倣的な作文は模倣なり、百点とりたかつたらひたすら模倣せよ、とある。私は呆ねなんでもわづらひたつたが、英文を書けたらいいなと思つて、ともかくいくらか覚えた。そんなふうにして作文を覚えても実際に使う機会などあるうと思えなかつたし、学生

亦に試験でもあるとはげぬにもなっただろうが、ひとりっぼちの勉強でぬてくれる
入とてなかつたので、例にもれずいかげんなところで非文はやめにしてしまった。
せつかく覚えても使う機会がないのでやがて忘却してゆく。それでもせつせと洋語
や漢文を暗誦していた当時の学習がとてもなつかしい。学校にもはいれず、親戚も
出来ず、世間的立身出世ほとものぞめぬ運の私であつたのに、何であの標にひた
むきに研習したのか、今の私にほとても考えることが出来ない。ともあれ、私が
エスペラント学習以前にいくら英語を学ばず外国語の学習の困難さをしみじみと経
験したことは、その後エスペラントを紹介されて私がその文法の平易、高い實用価
値存とをすぐ理解するのを容易にしたのはもちろんである。理解は直ちに掌握
となり、やがて私自身も学習をはじめた。自分で自由にエスペラントで書くこと
が出来た。という文句は、エスペラント宣伝に屢々使われるが、私も或はこの類し
文句にころりとなつたのかも知れない。日本語ではいきなり目的格がくるが、英語
や、その他たいていの外国語にはそんなものはない。ただエスペラントにだけはあ
るらしい。それも日本語とは全く同じとはいえない。たとえば *Vin batos*.
(葡萄酒、お前を。) と *Batos vin*. (お前を打つよ。) と比較すると、前者
の方が後者より意味が強い。つまり、すごい文句なのである。同じでんで、文章の中
の各句の目的格を全部日本式に前置の前に置いたら、それこそ「すごい文章」にな
る。この文法上の約束を知らないで、或は無視して、ただ単語を日本式に羅列して
いつたら、あちらの人はそれを読んで何と思うだろう。マペンは野蛮である、と思
うだろう。事實、私達がそれと知らずに、手紙などでうっかり日本語の書き方、考
え方をして、彼等ヨーロッパ人をしてあきれさせていることも多いかも知れないの
である。私達日本人のエスペラント文は概して教養的なものが多い様である。日本
人にだけわかるエスペラントでは困る。しかし、文法的に正しくとも機械的文章、
非個性的文章、エモーのない文章は読む人に何の印象も感興も与えないだろう。
私はこの頃しばしばそんな文章をヨーロッパからの手紙にも見る。ヨーロッパ人必
らずしも練達の記事家ではなく、必ずしもエモリストではなく、必ずしも個
性的であるとは思われない。私がこうして文通によって彼等を観察する程に、彼等
ももしかすると私達以上に犀利な観察眼を切らして私達からの手紙を仔細に読ん
で、そこからなにかもその長い鼻と鋭いさやうかくでかざだして、「日本人のど
くにエスペランチストの教養程度はかくかくしかじか」と評価しているかも知れな
いのである。なんとうす気味わるいことではないか。自分の言いたいことを正確に
云う或は書く、ということとは逆もむづかしい。まして人間の魅力、人格の反映を手
紙を読む者に感じさせるということは一筋むづかしい。だが、そこまでゆくことが
絶対に必要だと思う。エスペラントや英語による外国との文通は国際的なものであ
るから、日本人としてのきょうも忘れてはならないし、たえず研習しなくては、
五年たつても、十年たつても相も変らぬたどしい文章で相手にもあきらめられ、
又あきらめられるだろう。漫然とやっつけていても上達ほしない。何とかしなければぬ
という私のこの焦躁、エスペランチストなら読んでも共感してくれると思う。

泣きたる
英にひたる
に出かけて
これがエス
ていつて血
だから。理
方法は、作
おしなべて
である。統
とか「心の
木にまりて
たい。読者
そして文法
たりすると
人から発命
しいことだ
か身は上手
創作すること
して差血
所とあとに
といていた
ダを駆逐して
ちせんちや
ここに一人
「巨ざむり
さされて悲
このどちら
公認を私は
かいはずす
なこともす

(二の小
を書き散
これで私

生きたる言語を食得する一巻の方法はその国で呼吸してゐることだ。せめて窮困
にひたる機会をたくさんもつことだ。英語にたんのうになりたかつたらアメリカ
に出かけて血洗いででもするに限る。(それも電気洗濯機に洗濯されるまでのほなし)
これがエスペラントの場合、エスペラント国など形而上の国だから、そこを蹴りか
けて行って血洗いをするわけにはいかない。だいいち、エスペラントでは食えないの
だから。現在、私達がエスペラントに練達する唯一の方法、そして実際に効果ある
方法は、作文したり話したりすることよりも多読することである。私達の読書量は
おしなべてお結にならない程少ない。むしろ、ほとんど読んでないといつていい程
である。読む本がないので、などという人は寧ろ、口をひらくと「忙がしくて」
とか「心の餘裕がなくて」という。読むこと少なくしてなお書こうということは、
木によりて飯を求むると一般である。深山読むこと、これを今年のスローガンとし
たい。読書するということは食ふことだ。作文するということは飲らくことだ。
そして文法は規律、節制、鍛練ということにならうか。食べないで幼いたり哺乳し
たりすると母体は衰れ、意志沮喪し、健康は損なわれゆくだろう。だから、ふだ
んから充分読書して力をたくわえなければならぬ。作文するということはむづか
しいことだが習慣にすれば割に楽に書ける様になると思うし、又悪くない。これば
かりは上手になつてから書いてみるというわけにはいかない。創作力のある時期に
創作することをしなかつたら、芽はかれてしまふだろう。創作力というのは、概
して若い血気の時代にこそ一番あるので、この時期に何一つ書けずじまいだつたら
あとあとになつていくら悔いても遅いつかない。エスペラントも、上達してから、
といつていたら時期を失ふことが多い。だから、現在習得してしまつたテクニ
クを駆使して、ちよつと書いてみることは必要である。練達技能の入達からみれば
ちよつと書かぬおかしなものもみえるかも知れない。だが一念は岩をもぬくのである。
ここに一人鏡の下手な人が絵が好きで絵を書いたとする。意地の悪い人も多しから、
「巨ざわりだ、絵を畫くなんて柄ではない、やめろ。」というだろう。そして、く
さされて悲観してやめる人がある「自分には才能がない」といふかも知れない。そ
うに、このどちらも篤道根性の持主である。餌をつけないで釣糸をたれていたという大
公望を私は理解出来ないが、理解出来なかつたて、飯が釣れなくなつて私はおせつ
かいはずまいと思う。私も年をとつてかしくなり、或はばかになつたら、そん
なこともするかも知れないのだから。

(このかまはタイトルの示す様に、私のとりとめのない悪癖やら、願望やら
を書き散らすのが目的である。スペースをふさぐ、という意味もある。しかし、
これで私はおなご心も書いていっているのである。)

(1957. February, 20)



おもいで.....

サッポロ アリマ、ヨシノリ

1. Esperanto の知り初め

昭和の初めのある日、母校の鉄嶺高等小学校（在満州）から校友会雑誌「櫻葉」が届いた。よこんで開封してみた。というのは、表紙の中央に LA PRIMOLO と書いてその周圍に LA ORGANO DE TIEH-LING ELEMENTA LERNEJO といった風に外国語で意匠されていたからでした。わたしは日頃ニッポン人が紙批判に英語を使い過ぎることを悲しく思い、学生時代から英語禁止論を新聞や雑誌に発表していたので、「LA」なんてフランス語か何語か知れない外国語で意匠された、それも語学雑誌ならいざ知らず小学校の機関誌の表紙の文字として図案されたことに心からファンガイしたわけでした。さっそく校友会の幹事長宛にコウゼ文を出しました。ところが、4-5日後に巻紙にも筆で長々と書いて、表紙のコトバはフランス語でも英語でもないこと、これは世界中の共通語で Esperanto という国際語であること、英語禁止を唱える貴君こそ平光してこのコトバを等ぶべきであること等を前置して、文法を一通り述べ、表紙のコトバを分解して説明した返事が来たので、そのときに初めて Esperanto という国際語のあることを知ったのでした。それから 2-3ヶ月をへた秋のある日に、大連エスペラント会主催の Esperanto 短期講習会が初められることを知ってさっそく会費一円を添えて申込しました。当時の申込者は初めの予想の値以上で 200 名余りになり、主催者はうれいし懸念をあげたとのことでした。ところが講習会が終る頃には数えるほどしか残らず、最後に大連エス会の会員として入会したのは現在派状におられる s-ro 北尾虎男と私とのたった二人きりでした。その後もよく kurso を開いたようでしたが、殆んど残る者はありませんでした。それで Esperanto の講習会では残らない方が普通で残るのは奇蹟なのだといつてはあきらめなくさめ合ったものです。

2. 甘いからい Esperanto

大連満洲工專の学生時代、英語・シナ語・ドイツ語を正課として学ぶ身に、もう一つ Esperanto を勉強するのはムリだったのでなかなか学習は進みませんでした。だがカナモジカイ会員であり、日本ローマ字会の会員でもあり、当時大連エス会の委員であった s-ro KUROZUMI-Tuneta から強制指導されつつ初年講習もろくろく終らないうちに中等講習に参加させられて、一方 s-ro ISIGURO-Yosimi 著の独習書で勉強したのですがいつも分詞接尾辞のところまで足ぶみし、行きつ、戻りつしてはいました。こうして、分つたような分らないような勉強をし

ている頃に第何
参加したのでし
生まれて初め
て始まるのを待
Esperanto が
すると会長の口
……。という
た。Esperanto
て丁度甘からせ
しましたが口早
ませんでした。
ア。は "Am
た。この Esper
一つ何か Esper
ンデモない決心
がおこなった演
よく判らない文
かかり引つか
どうか、又にな
暴を振り返つて
で勉強を続けた
ず、又も書けな
知れません。



かなり以前知
いるのをぞいた。
執筆がこの噂の傳
となのだというこ
患者は非エスペラ
と云そのエスペラ
スんじそこのらの中

ている頃に第何回目かの満州エスペラント大会が開かれることになって私もそれに参加したのです。

生まれて初めて見る Esperanto 大会がどんなものであるか大きな期待をもって始まるのを待っていました。時間が来て会長のアイザックが読みました。会長の Esperanto がどの程度私にわかるだろうかと舌の流れる口を見つめていました。すると会長の口からび出した最初のコトバは “甘い。からい。ゲサミデア……” ということばでした。それを聞いて私はすっかりめんくらってしまった。Esperanto ってなんておもしろいコトバだろう。甘いからい。なんて言っただけからセンベイ見たいなものだと感心して、そのあとのコトバを聞くとうれしかったが口早に話されるので、ただ estas だけがわかつたきりで何もわかりませんでした。その後勉強が進んで、かつての大会に聞いた “甘いからいゲサミデア” は “Amataj karaj gesamideanoj” であつたことがわかりました。この Esperantista Kongreso に参加するようにすすめられて、では一つ何か Esperanto でシヤベってやろうと、estas しか判らないくせにトンデモない決心をして、1905年春1回滿洲大会で D-ro L. L. Zamenhof がおこなつた演説の初めの部分から取つたり、会誌の本から集めたりして自分にもよく判らない文章をでっちあげて、暗記し、大会の席上で思い出し思い出し、引っかかり引っかかり、本を読むようにシヤベりました。もちろん、勝手に判つたかどうか、又になつていたのかそんなことなんか考えもしないで……。当時の緊張感を振り返って見ると顔が赤くなります。しかし、あのときの大胆さ、熱心さで勉強を続けたならば、二巻後のいまだにろくろく Esperanto での会誌もできず、文も書けないようなとんでもない Esperantisto にはならなかつたかも知れません。

読者の声 (但し, Heraldo de Esperanto の)



Ĉu esperantisto povas esti Kontraŭa al Esperanto ?

(いかにエスペランティストたる者がエスペラントに絶定的であつてもよいものであろうか?)

かなり以前私がゼノアに在つた時、私は慶々野の人達が次の様な噂をしてゐるのをぞいた。「誰が塔を荒廢させるかといへば善の船乗り連さ」そしてもしも私達がこの噂の信憑性をたしかめたなら、これが奇論でもなんでもなく、實際のことなのだといふことが分るだろう。エスペラントの場合も、エスペラントの眞の妨害者は非エスペランティストではなく、むしろエスペランティスト自身なのである。たとえそのエスペランティストがいわゆる ĝisreviduloj (ありまじりの、機嫌直はぬるという人々) であろうと、eminentuloj (大家達) であろうと同じ

こと。況にかかせる東側が私のこの意見が正しいことを雄辯に物語ってくれるだろう。

数ヶ月前、同志のオランダ人が観光旅行の道すがらミラノにも二日留滞した。(私はその人の名前については沈黙したい。何故って、私の関心學はその人にあるのではなく、その人の無術端にあるのだから。) 当然のことだが、彼も、その土地での宿泊や見物の便宜をはかってもらうために、その土地土地の U.E.A. deligito (国際エスペラント協会委員) を廻つてあるいていた。だが、ミラノの委員は暇がなかったのを彼を私の方へ廻してよこした。それで私は、私の家から近くて、小さくとも恰好な宿屋で、しかも彼のためには宿泊料の比較的安い清潔な室を見付けることにとめた。

翌朝、私は彼を街に伴った。そして、彼の言うがまゝに彼を旅客案内所に連れていった。彼は帰国するために切符を買おうと思つたのである。彼はそこの事務員に向つて私には全くの外国語で、つまりドイツ語で言はじめたのを私は啞然としてきた。彼は自分がエスペランティストであるということをしてんで念頭においていなかった。その時から私の眼には彼が変な理解し難い外国人に見えてきた。

私達が旅客案内所から出た時、私は、「エスペラントは何にも役立たぬ」とか、「エスペラントは誰にも、どこでも話されてはいない」などという半エスペランティスト達の愚かしい風評を蒙るることになってしまうその彼の許しえぬ不可解の行爲のために、彼を非難するのにも自分を制することが出来なかつた。

エスペラントを生きた言語として役立てようと思う良心的エスペランティスト達は次のことを綱領としてもらいたい。すなわち「エスペランティストたる者は外国に行つてその面のエスペラント通訳者、に付添われり助けをもらつたりする機会がある時、たとえその人が訪れている面の言語をよく知つていても、私用にはかりではなく、とくに公共機関の事務所などでもエスペラントだけを使うことがエスペランティストとして道徳上義務づけられていゝことを考えなければならぬ」せもなければ私は外国の同志達にはつきりとまじめに勧告したい。そんな同志なら、旅行の便宜のために地方のエスペランティストを訪ねるべきではなく、まづすぐに母国入通訳のたくさゝいるところにゆくか、それとも、今はこの文明の國のどんなちっぽけな町にさえもあつた旅客案内所にゆくべきである、と。

心あるエスペランティストにならわかつてもらえるだろう。そしてエスペラントのために協力してくれるだろう。

Q. G.

(Tradukita de s-ro YAMMOTO. 1953. 2. 25)

◎ この一頁は Heroldo de Esperanto N-ro 1169 (1952年12月1日附)の「読者の声」の中の一つで、いろいろと教えられるものがある程に思われるので紹介することにした。

Brazilia
Countinho 氏
k. la unua
紹介したいと思つ

月刊誌 Espe
と星に関する最
業に頼れる凡て
(ポーロン) 水
の二つのシンボ
れてを直ちに誤
が出す凡ての清
同様にされる遊
オニの記号は
「我々の事業に
受けた。我々の
見が一一致し、
Rjabinim は、
星は緑のバック
でよい。s-ro
い類単純矩形
浮かせて、ど
ているし、既
ンプに使つて
或は Esperan
この三つを互
ことは夫々の
思う」

4p. 8行

緑星の由来 (1) 朝日新聞(訳)

Brazila Esperantisto (sep~okt/1952 号) の p.6 に A. Caetano Coutinho が Pri la deveno de la verda koloro, la steilo de Esperanto la unua esperantista insigno と題して興味ある記事をのせているので紹介したいと思う。以下抄訳を描げる。

月刊誌 Esperantisto N-ro 3 (39) Jaro IV (15/Mar/1893) p.47 に「緑と星に關する最初の記事が見える。『我々の天賦の凡ての表紙に、我々の事業に關する凡てに緑色を使い、上に星をつけよう』と S-ro L. de Beaufront (ボーフロン) が云って来た。そうすれば星を伴った緑の色 (espero, esperanto の二つのシンボル) は我々の仕事の一様な外部的しるしになり、我々に属する凡てを直ちに認められるだろう。我々はこの思いつきに本當に賛成し、私は私が出す凡ての書物に今後それを使おうと思う。我々は我が出版者友人諸君にも同様にされる様提案する。』—(ザメンホフが書いたもの)

オニの記事は N-ro 6 (42) Jaro IV (15/Jun./1893) P. 84 にある。「我々の事業に対するしるしとしての星に關する S-ro ボーフロンの提案は絶賛を受けた。我々の凡ての交通者達は、これが我々に最適のしるしであることに意見が一致し、このしるしに關する色々な細かい事を提案して来た。S-ro G. Rjabinin は、青い望む金屬の中央に小星を伴った直径 2~3 センチの小円で、星は緑のバッグの上になければならぬ。それをつける方法や場所は、各、勝手によい。S-ro P. Deullin は、使用者の好みに従って、どんな材料でもよい簡単な星形がよい。"Ligo ESPERANTISTA. 或は "ESPERANTISTO. を浮かせて、どこにでもつけてよい。なぜなら、殆ど凡ての人は緑と星に賛成しているし、既に多くの友人が Esperantisto とゆう表現を自分のスタンプに使っているので、我々の事業の決定的サインは、緑・星・Esperanto 或は Esperantisto の三つに段々なると思うからである。と提案している。この三つを互に如何にまとめ、どんな形、どんな場所に用いるかなどの細かいことは夫々の好みにまかせよう。これも亦時と使用が一定の何かを差みだすと思う」

(daŭrigota)

正誤表

4p. 8 行目 I am sorry... の次に I trouble you. がくる。



Vulpo sendita de Dio



ŬAKISAKA-KEIĜI

S ĉerbejo de valo de ĉu monto, vivis maljuna vulpo, kiu estis respektata de ĉiuj: simio, lupo, leporo, cervo kaj aliaj, ankaŭ kiuj same vivis tie. La vulpo estis tre saĝa, sed ankaŭ tre ruza, pli ol tiuj, kiujn oni trovas malofte en la homa mondo. La vulpo estis ĉiam kun Dio kaj kuŝis senlabore ĉiutage en kapelo. oni nomis lin "La vulpo ŝervanta al Dio". Se la vulpo havus al si taskon, ĝi estis nur tio ke, kiam ĝi havos al si ian neceson, li al-vokas ĉiujn kredantojn antaŭ sia kapelo kaj predikas.

"Vi prenu vin energie en via tasko. Vi ne tromu reciproke unu la alian. Vi amu kaj kredu reciproke alian. Kaj la vulpo aldonis plue kun serioza mieno:

"Vi ne mortigu ĉiujn vivaĵojn, ĉar tiuj ankaŭ vivas en favoro de Dio."

Tial ĉiuj laboris kun sia tuta energio. Ĉiuj ne trompis reciproke unu la alian. Ĉiuj amis kaj kredis, reciproke alian kaj ĉiuj mortigis nenian vivaĵon. Sed supozu, ho, kiel ili do nutras sin mem!

Estis somero! Jen sur la herbejo kaj la monto jam tre dense kreskis: herboj, arboj kaj aliaj. La valoj aspektis tre feliĉaj. Jen sur la herbejo la leporoj saltis kaj saltis ĝojplene, ĉar la herboj tute verdigitaj afable akceptis ilin. Sed kiaj malfeliĉaj estas lupo, urso, leono, cervo kaj aliaj grandaj bestoj! Ĉar ili nur rigardas tiel gajajn kaj bongustajn leporojn kaj iliaj stomakoj nun estas tute satigitaj por la

rigardo. Ili
la vulpa p
leporojn k
Baldaŭ
kastanoj.
ili kolektis
ro, nun sta
Iun tago
"Estas ja
Kaj la
"Devas e
de Dio, vi
jam rikoltis
vin al la f
Tial ĉiuj
"Ho, mi
kapon. La
en sia buŝo
predikis al
Dio nun ric
vin al la
vi oferu al
Dio kredible
Ĉiuj do
dante la vo
denove:
"Vi prenis
al vi pli gra
kaj li pensis
Dion. Li
ke la leporo
havas grand

rigardo. Ili estis tre fidelaj, nun ankoraŭ kredas sin al la vulpa prediko-----, Ili ĉiutage nur rigardis vane leporojn kun sonoj en sia gorgo.

Baldaŭ aŭtano venis. La multaj rikoltoj : grenoj, kaŝtanoj, herbaĵoj kaj aliaj bongustaj nutraĵoj, kiujn ili kolektis kun granda peno dum printempo kaj somero, nun staris antaŭ ili tiom alte kiom monto.

Iun tagon, la vulpo vidis ilin kaj pensis :

"Estas jam pretigita."

Kaj la vulpo alvokis ĉiujn kaj predikis :

"Devas esti tre benite, sinjoroj, ke dank' al favoro de Dio, vi finlaboris sendanĝere. Jen vidu ! Vi jam rikoltis tiom da grenoj, vi do nun ne forgesu vin al la favoro de Dio !"

Tial ĉiuj kredis en unuiga vorto :

"Ho, mia Dio !" kaj klimis malsupren al tero sian kapon. La vulpo fiksas sian rigardon al ili kaj murmuris en sia buŝo ; "Mi devas jam komenci." La vulp ankaŭ predikis al ĉiuj : "Tio estas tre bona, sinjoroj. Dio nun ricevos vin afable, Tial vi ankaŭ devas oferi vin al la favoro de Dio. Plej bona estas tio, ke vi oferu al Dio la trionon da grejnoj el viaj rikoltoj. Dio kredeble ricevos ilin !"

Ĉiuj do alporti al la vulpo trionon da grejnoj kredante la vorton de Dio. La vulpo vidis ilin kaj diris denove :

"Vi prenis vin en bona farado. Dio baldaŭ donos al vi pli grandan favoron", kaj la vulpo ekvidis ilin kaj li pensis ke ili ankoraŭ ne dubas lin same kiel Dion. Li do daŭris sin = "sed ĉu vi bone scias ke la leporo estas kreita en la amo de Dio ? Li nun havas grandan kompanion al la leporo, ĉar la vintro

baldaŭ atakos ilin severe por tia malvarmo. Li do volas alvoki ĉe sia loko. Se vi komprenos, do alportu ilin laŭ la volo de Dio !

Jam estis la komenco de la vintro. Ĉiuj obeis kaj alportis ĉe Li tiel grandan kaj blankajn leporojn de tie kaj ĉi tie, kaj ilin oferis al la servanta vulpo. La vulpo ilin vidis kaj diris kun granda ĝojo :

"Tio estas tre bona, simjoroj." kaj la vulpo klimis supren al la ĉielo sian vizaĝon metante sur la bruston siajn manojn, kaj plue kriis : "Ho, Dio ! Vian favoron sur ili !"

Kaj la vulpo iris en la kapelon, kunportante la leporojn kun multaj rikoltaĵoj, kiujn ili alportis ĉe la kapelo. Jam falis neĝo de sur la ĉielo. Ekstere estis tre malvarme. La vulpo nun senfalis la haŭton de l' leporoj, kaj ilin la vulpo prenis kiel tapiŝon kaj ankaŭ viandon kiel manĝaĵon. Kredeble la vulpo sufiĉe nutros per ili sin mem dum longa vintro. La vulpo ankaŭ starigis ĉe la muro alte en la ĉambro la rikoltojn kiel monton.

La vintro nun tute profundigis : neĝo dense etendiĝis sur la herbejo de la valo, kaj vento severe blovis tie. Sed kie dum tia malvarma tempo la fidelaj bestoj nun estas ! Kiel ili vivas dum longa vintro sen viando, sen nutraĵo !

Vi, legantoj, nun povas, ĉu ili estas feliciĝaj aŭ ne?

~~~~~ Fino ~~~~~



この町の美しさは我々にも起伏する街路の間に美しいビルディングや、色彩はなやかに塗られた家々が一望の中に見られるところにある。そしてこのカーは例年に愛用者のベンチもあってカリフォルニアらしい、感じの良いカーであった。電車で橋を下ると、忽ち私達はしゃべった。彼女は町を説明し、私がそれに相應をうつつである。僕が質問し、彼女がそれに答えるのである。すると乗客の耳と口が私達の方をむいた。再び、「この紳士は日本人で……私達はエスペラントで……」とやるのである。全く恐れ入ったことである。僕は初輪をふんだように赤くなるが、彼女は悪に介しない。最も愉快なエスペラント。アロパランドである。市内を歩いて、此を十べ人近くも繰返したであらうか。支那人街で私達は降りた。ここはシンガポールと同じように支那人の家が並んでいる。私達は二匹の店に入って物色したが、日本製品が意外に多いのに驚いた。陶器類は大抵日本品である。民藝品のよいものばかりもなし、いかにもアメリカ人向けの、きれいに彩色された工業製品(日本陶器)が多かった。陶器についてだけしやその他の日本時産品もあつたが、それらについて今度は僕が幾分の説明をした。支那人街から銀行の多いコロンパスストリートに下り、私達は歩きながら銀行の建物を観察した。ウォルフさんはその大理石のマウンドメントを指して、「Marble」といつた。「Tio ĉi montras usonan vizon!」(これがアメリカの富をなす) それから私達はその銀行の一つの中に舞い込んだ。私達が手を触れずともドアは自然に動き、私達が入るとドアは自然に開いた。クリスマスデコレーションに輝く、天井、廊下、中央のクリスマス・トリー、年末を前にしてや、忙しそうなる事務所、客も相当多数あつた。いかめしい守衛がいたが、彼女が「彼は日本の……エスペラントで……」という相好をくずした。次の銀行にも私達は入った。やはりクリスマスデコレーションはあつたがひっそりしている。私達は丁度現れたエレベーターの中に入った。エレベーター・ガールが何階かときくとすぐにウォルフさんは「彼は日本から昨日……エスペラントで……」という。そして私達はエレベーター・ガールの好意で一巻高い(15階)ところまでゆき、そこでしばらく市内を見下ろすことが出来た。二つの階の間に並ぶ並ぶ多くのビルディング、小さな隣のような間建、逆光がさんさんと降りそそいであざやかな空の色がそれらと明らかな区別をなしていた。再び歩いてボストンストリートの店にわたって歩いた。ウォルフさんは妹さんの為にかみ器屋に寄つたがそれから僕の要望によってデパートに案内してくれた。それは日本のデパート程大きくはなかつた(4階)が店内はきれいに飾られて(特にクリスマスセールのためと思ふ)狭く密に對する設備がよかつた。エレベーター、エスカレーターはもとより、喫煙室、休憩室も備へて出ていた。一階はクリスマスを前にしての土曜日で相當な混雑ぶりであつた。入口のドアの傍に現金資金を築める女學生が鈴をならし「聖夜。—Holly Night 互歌つていて、ウォルフさんがいくらかを箱に入れた。それからウォルフさんは Yellow car (ハイヤー)を叫びとめた。「公園に行きませう」。人混みの市街から離れて、私達の自動車は大きな静かなビルディングの傍を通つた。ふとウォルフさんは運転手に道を違つていと詰問した、すると運転手が、ストレンジャーにオペラ座と市役所をみせると答へた。私はそれを見た、さほどに大きな市役所でもなかつたが、庁前にや、広い庭と噴水があつた。オペラ座にはその起音楽会があるとのことであつたが、そのたてもものは決してよいものではなく、むしろ露店のような感じであつたし、その周囲はひっそりとしていた。私達の自動車はフェルストリートを通り直ぐゴルドン・ゲートパーク(金門橋公園)に入ってゆく。久しぶりの緑が僕の目をたのしませる。帯緑の葉が真夏の太陽にきらめき、僕は beie verda! と叫ばざるを得なかつた。その腕の本々も日本の常緑樹によく似ていた。そして僕はそれらについても話しかける。ウォルフさんが突然運転手に





# 合成語の単語化

el mia babilado

千葉三郎

小学一年生の子供に 1+2 は？ と問えば、指で数えて3と答える。これは小学生の算数であるが、この3といふ答は新しい飛躍の新しい形である。

これとエス語の合成語とはその意味が違ふかも知れない。然し飛躍した新しい形では全く同じである。エス語の合成は皆様ご存知のように一つの語根を知ることによって色々な新しい形の、然も意味の違つた言葉を造ることが出来る。こういふことは外国語ではどうなつてゐるか知識が全然ないので引用することが出来ないが、日本語について言えば、このエス語の合成と同様のことが言える。つまり漢字の組合である。

鉄+道 = 鉄道 鉄+筆 = 鉄筆 鉄+管 = 鉄管

石+筆 = 石筆 石+炭 = 石炭 石+油 = 石油 等々である。

しかしこれらの語は合成語として教えられてきたのではなく、一つの単語として教えられてきたのである。従つて、その点エス語の合成語とは意味が違ふがその形は全く同じである。

さて、エス語では先に述べたように、一つの語根を知れば数々の言葉を造れることは皆様ご存知の通りで、例えば；

語根 ven' (来る) に対し

re + venit i = reveni (帰る)

al + ven + i = alveni (来させる)

bon + ven + i = bonveni (よろこぶ)

語根 manĝ (食ふ) に対し

maten + manĝ + o = matenmanĝo (朝食)

tag + manĝ + o = tagmanĝo (昼食)

manĝ + aj + o = manĝaĵo (食物)

こうした合成によって吾々はエス語学習上単語の記憶が非常に軽減されるといふことを教えられて来た。然し吾々はここで考えさせられることは、總ての合成語も、その合成された語そのものが、しばしば反響されて使用されてくるとき、その語はもはや、合成語といふ觀念からはなれて、それは一つの独立した単語として人々に受け入れられることである。例えば吾々の日常いふところの Esperanto といふ語もその一つで、今日それを合成語として Esper + ant + o といふ語の成立などと考えることなく、それは単にエスペラント (それが希望しつゝある者といふ意味あり) といふそれ自体独立した語として觀念し、その意味で人々が使つてゐることである。このように使用の道程に於て今日それが合成語より成立つたものでありながら既に単語化したものは恐らく数知れずあることであろう。

Samide  
sociali

以上一部を  
題名などは一  
れる。この

それは既に合  
てゆくであら  
ック又はジフ  
て完全に消化し

このような真  
々せばめられて  
より新しい言  
atombombo  
より単語化して  
化は将来に於て  
族語の単語と同  
る。

Sur marbon  
de ĉi Hokkaid  
\*diskuto n a  
tiel? An  
granda balen  
la du vilaĝer



figuras du

samideano (同志) estimata (尊敬する) komencanto (初學者)  
socialismo (社會主義) japanujo (日本)

以上一語をあげてみたが、もしせんざくすれば数多くあげることが出来る。殊に  
国名などは一つの単語と考へて受入れた方がハッサがなく有利ではないかと思わ  
れる。このようにどの語でもそれが社會の進化発展に従つて反覆繰返されるとき  
それは既に合成語によるといふより単語化した一つの語として人々の間で消化され  
てゆくであろうといふことである。例えば日本人が今日、ナイフやステッキ、トラ  
ック又はジープなど、それが何等外國語であるという觀念にとらはれず日本語とし  
て完全に消化してゐると全く同様である。

このような見解からいつてエス語の合成化は社會の進化発展に従つて、それが扱  
々せめられてゆくことが一応感じられて來ることである。勿論遂に社會の発展に  
より新しい言葉が生れ、合成語が必要となつて來ることも考えられる。例えば  
atombombo (原子爆弾) のようなものである。然し、そうした新しい合成語  
より単語化してゆく語の方が比較的が多いのではあるまいか。結局、エス語の合成  
化は將來に於てそれは獨立した単語として受入れられることであつて、それは又民  
族語の単語と同一の歩調をとらねばならぬのではないかと、かく考へてみたのであ  
る。

( 1953. I. 28 )

## ROKO "ĈARANKE"

Sur marbordo inter Date-maĉi kaj Abuta-maĉi en suda parto  
de ĉi Hokkaido, kuŝas roko nomata "Ĉaranke"; kiu signifas  
"diskuto" aŭ disputon en aĉia lingvo. Kial oni nomis ĝin  
tiel? Antaŭ, longa longa tempo, mirinde al la bordo, albordegis  
granda baleno. Jen komenciĝis vigla disputo inter aĉoj de  
la du vilaĝetoj por gajni la balenon.



La disputo estis daŭrigita tra  
tri tagoj. Finfine aĉoj de Date  
venkis alian, kaj gajnis la balenon.

Sed, ho ve! Tuj kiam la disputo  
finiĝis, ĉiuj disputantoj ŝanĝiĝis  
ŝtonoj nur unu momenton.

Ĉu dio koleriĝis la avaran inter-  
disputon? Ial, ĉi "Ĉaranke",

figuras du pozojn; unu — imponanto, alia — genuanto.  
(el Hokkaido-Simbun 22. Feb. 1953)



## MURMURO en iu tago

F-ino  
YASUKO, KAYAMA

### III VIRINO KAJ FELIĈO

—Por mia saĝa kaj sincera amikino—

Iu penso atakis min, kiam mi estis promenanta parkon kun ruĝizintaj folioj. Tio estis virina feliĉo. Mi ofte trovas tian pri-skribon en ĵurnaloj aŭ gazetoj. Mi pensas, kia! oni traktas precipe pri virina feliĉo, kaj tio estas nur pri virina feliĉo sed ne pri homa feliĉo. Kaj kunezisto de ĉi du feliĉoj estas tiel mal-facila, kiel la problemo pri du virinivoj, en otico kaj hejmo.

Kiam unu talentoplena virino ekpensas per labori por socio kun sia kapablo, kaj ŝi deziras la feliĉon kiel homo en tia vivo, unu fojon ŝi devos pensi forlason de sia feliĉo kiel virino. Ĉiuj virinoj havas grandan amon kiel ĉiuj viroj havas grandan ambicion. En la verkoj aŭ la laboroj de tiuj virinoj, kiuj forlasis virinan feliĉon por popobamaso aŭ por sia deziro, mi trovis ilian grandan amon, samtempe havas iometan mal-ĝojn pro ke ili ja estas virino. Mi ne ŝatas tiujn vortojn, sur-metitajn virino—; ĉar el la vortoj, mi sentas "virinon kontraŭ homo"; kaj tio estas nek virino el honaro, nek kontraŭ viro. La kusitan ideon, ..... homo estas viro, sed virino ne est-as virino mem ..... mi sentas en d versaj vortoj aŭ aferoj de socio. Pri la kialo, mi pensas jen.

La homsocio estas posedata de viro, kaj virino estas nur objektiva ekzistaĵo; ĝuste pro tio!

Ŝajnas al mi, ke certe virino estas malpli supera ol viro kiel homo, tamen objektivigi virinon por mi estas malĝoje. Post milito, ni virino gajnis egalecon en leĝo, kaj ni fariĝis virino kiel homo, kaj al mi ŝajnas, ke virino jam ne estas fariĝanta virino kontraŭ homo.

### IV. F

Tiu ĉi t  
pri feliĉo, k  
mi pensas t  
feliĉo, ĉar  
abstrakta. I  
kuirajo, kaj  
aĵo estas!  
malbongusta  
sento estas  
as ambaŭ d  
socio, kaj la  
iĉo. Ĉi tie  
tuta materia  
libertempo.  
kiel mi di  
nome, general  
Malfeliĉo  
devigata de  
kaj sanon, p  
kiu konsola

Ofte oni di  
de tempo aŭ  
rekte al sia  
ke sian feliĉ  
iomete da m  
veran feliĉon  
grandan valor  
Ĉe la fin  
malesperego



#### IV. FELIĈO KAJ SINMORTIGO

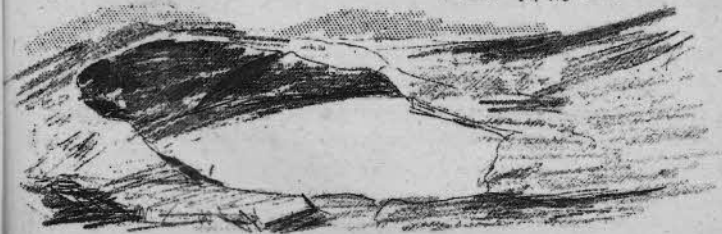
Tiu ĉi temo estas preskaŭ sama al N-ro 1. Oni diras pri feliĉo, ke tio estas problemo de mia subjektivo, ankaŭ mi pensas tiel, sed mi deziras kredi ekziston de objektiva feliĉo, ĉar la feliĉo en mia koro estas tro malklara kaj abstrakta. Ekzemple, tie ĉi estas nutroplena kaj artefarita kuirajo, kaj plej multaj dirus "kiel bongusta ĉi tiu kuirajo estas!" kaj aliaj mal multaj dirus grimante "kiel malbongusta! Mi ne ŝatas!" Oni ne diras, ke gustosento estas problemo de subjektivo. Generale, kunezistas ambaŭ du manĝaĵoj bongusta kaj malbongusta en mia socio, kaj la feliĉo, pri kio mi deziras diri, estas tia feliĉo. Ĉi tie mi supozas unu homon, kiu estas favorata de tuta materia kaj objektiva feliĉo, kompreneble multe da libertempo. Eble li rigardos sin memi pro ekscesaj horoj, kiel mi diris antaŭe. Tro sinrigardi estas malfeliĉe, nome, generale introspektaj homoj estas malfeliĉaj.

Malfeliĉo de malsanulo estas kaŭzita de tio, kio estas devigata de sia malsano. Kaj li havas liberan riĉaĵon kaj sanon, pro tio, li ne havas eksteran rezonon, per kiu konsolas sin aŭ transformigas sian respondecon.

Ofte oni diras pri sia senkapableco "Tio estas pro manko de tempo aŭ mono"; sed ĉi kompatinda homo devas fronti rekte al sia senkapableco, plie li ne povas konscii klare sian feliĉon. Ni bezonas iom da malfeliĉo (nome, t.e. iomete da malriĉeco aŭ mallibereco) por konscii kore nian veran feliĉon, same kiel malsanuloj sciigas plejbone la grandan valoron de bonsano.

Ĉe la fino, mi pensas, ke feliĉo estas varmobedo de malesperego kaj malesperego estas fonto de sinmortigo.

— F i n o —



私達はエスペラントでレババでいるが、エスペラントはきれいに聞こえるか」と聞いた。運転手は「そうです。サドにも私には理解できませんでしてね」と答える。それからウオルフさんは私達の会話について、僕のおしとべりについて逐語をしてくれた。上り下りがあり、カーブがあり、そして若い人達がボートを滑りこいでいる池の廻りをめぐって再びとって返し、支那風の家の前でもあった。支那式の門があり私達はそれを踏んでその家の中に入る。再びまやりに似た支那人の茶室が待つ、子供を連れて夫のお客が腰を下ろしていた。ウオルフさんはお茶と菓子を用意した。日本で見たいことのある煎餅菓子と支那茶が出た。支那茶の味には野草のにおいがある。煎餅をわるとおみくじがでてきた。ウオルフさんは「待て来る。で、僕のは、少年時代における如く幸福ならん。である。どうやら当っていたようだ。静かな公園のどかさ、人になれたリスが私達の前にたつと煎餅を求めた。ウオルフさんが此に似た小帳に「How do you do... と挨拶しなさいよ」というと、その小帳はいわれるとおりに何度も「How do you do... をいった。リスはびっくりして小帳の表をみつめていた。壁には掛や、つじもあつた。大鼓橋や五重の塔も、プロットの佛像もあつた。昔は日本の龍圖もこの近くにあつたのだという。私達はその庭のすぐ隣り De Young Museum に入る。ウオルフさんが午後にはお茶に何事があるというのでゆつくり全部を見る時間がなかつたが、カリフォルニア映画会の展覧会や現代アブストラクト映画の小品展、古美術展、名を忘れたが数年前ニューヨークに出た有名な女の人の作品展等を見た。アブストラクトではすでに最近日本でも公開されている西画（姑も名前を忘れた）の絵も二、三あつた。古美術展はすばらしいものであつた。ルーベンスの The tribute money やゴッアの The thunderstorm など特に印象に残っている。明日からはレオナルド・ダ・ビンチ展があるとの事であつた。私達は再び歩き始めた。樹木の高く生い茂る道の両側にたくさんプロント像が並んでいた。その一つ一つを彼女にたずねることはむづかしかつたが、突然「Jene! (はら、ここに) と彼女が叫んだ。Selvantes!(セルバンチス) と親の葉の蔭に高く、によきり大きな森! まされもない! そして、ドン・キホーテが旗を折りあげて旗に群集していた。何故セルバンチスの像がこのようなところにあるか尋ねたら、この市の開発者はスペイン人であるという。町は、1700年前にスペインの一伝道者が立てた小さな村が、今やこのような大きな近代都市になっているとのことである。公園を出て、私達は再びフルトン・ストリートへ、そして若いバスに乗って、ウオルフさんの家に向つた。乗車中にウオルフさんが「O, Fimo Marshall!」というので振り向いたら、ウオルフさんと同年輩の小柄なお婆さんが並んでここにしていた。「Bonar tagon. とその人はいった。ウオルフさんが僕を紹介してくれ、僕はこの人がエスペランチストで、バイエ教の信者。L.J. マーシャル嬢であることを知つて驚いて「Bonar tagon」と挨拶をした。けれどこの人は本当に隣車しなればならず、握手だけで下車していった。バイエ教についてウオルフさんが説明してくれたけれども十分に理解出来なかつた。

家に帰つた時、再びエスペラント運動について質問した。ウオルフさんは各季毎に講習をひらくのだが、集まる人は少く、十分にエスペラントで話し得る人もウオルフさん一人だそうである。sola というウオルフさんの表現は間もなくから賛成され、サンフランシスコのエスペラント運動を一人で推進しているこの人に敬意を捧げる。(オークランドにはエスペランチストが多い) 乗車者の中に日本人二世、銀本エキオ氏がいた。ウオルフさんは、すぐこの家に来よう電話をかけた。まもなく、公園の隅が聞こえ、彼女は息で「Bonar tagon を日本語でなんというかと大きくから、「今日よ」と僕は散らたら彼女はいそいそと玄関に出て、「ゴンニチウ」とい

40年ほど、しかり  
は武蔵にや出て  
めい今日日本戦争  
で、三人の間に英  
ゆくことになった。

His review

それから私達は全  
椅子に腰を下ろし  
日本ともつと人と  
人とお婆さんが帰  
れから何回車を降

東洋人、白人、黒  
しく、二三の居て  
て日本人商店も相  
ものであるという。

した上等の料理に  
暗くなった街路に  
という。1951年  
本郵船のアパル  
船に帰つたとき、

間長も広島県入で  
活について知ること  
セント。日本みたい  
の子供のある女が  
流村とよんで金銭

元、僕は数々の打  
らも、悲憤的にエス  
われた。エスペラン  
りと幸福感に群つ



40年壁。しかし服装からして非常に若く見える熊本氏が元氣よく入ってきた。熊本氏は、中学  
休島へ出て1930年にアメリカに帰ってきているのだから日本語は全く自由で、そのた  
めに今日本領事館につとめて居られるのだそうである。けれども氏はエスペラントは話さないの  
で、三人の間に英語とエスペラントと英語が錯綜した。妙な感じである。ともかく僕は氏の家に  
行くことになった。

Giis revido, Good bye, とウォルフ杯杯に別れをつけて僕は熊本氏の車に乗る。  
それから私達は全く日本語で話す。エスペラントで話さないで都合がなかったが、氏の車の基  
構子に腰を下ろし英語を話す子供達と一緒にテレビを見てみると、僕はアメリカともつかず、  
日本ともつかぬとんでもないところにぼんやり坐っているような妙な感じに打たれた。氏の奥さん  
とお嬢さんが帰ってきた。奥さんも日本の女学校を出て居り日本語で話す。ビールのみ、そ  
れから自動車を駆けて支那町に行った。

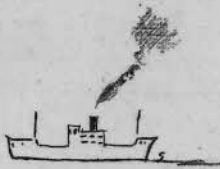
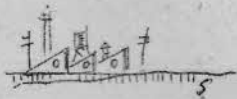
東洋人、白人、黒人の石径往する繁華街。熊本さんは相当たくさんのお店がこの町にあるら  
しく、二三日の足では扱撈した。日本語で話す若い女がいたが支那人であるという。開けば、か  
つて日本人商店も相当数この町にあったのだが、戦争中に安値で支那人に売り払い、今は撃つた  
ものであるという。私達は支那食堂「秘園」に入る。料理の名は知らぬが肉をいろいろに細工  
した上等の料理に舌鼓を打った。

暗くなった夜路にはネオンが輝いている。熊本さんが2300ドルもの全滅車をあげて買った  
という1951年型(名を忘れた)には全くすべるようにして長い道を走った。遠く埠頭に日  
本郵船のフアネルマークを見たとき、家に帰ったような安心感と夢からさめた虚脱感とを感  
知した。

家に帰ったとき、一応宿舎を案内し、それから私達を招き入れた機関長の室に入った。幸い機  
関長も広島県人であるが熊本さんと話があつてよかつた。いろいろの話の中で、私達はアメリカ人の生  
活について知ることが出来た。物価は私が感じたように高い。床屋などは刈りだけで1ドル50  
セント。日本みたいに顔をそり、頭を洗おうものなら5ドルもとられるという。15才以下2人  
の子供のある4人ぐらしで最低350ドルを要するだろうということであつた。又、日本趣味が  
流行るよんで金銭趣味は特に着しいものがあるという。

夜、僕は数々の幻想にふけた。夢のような一日を思い出した。さみしい独身生活を続けなが  
らも、熱情的にエスペラントを普及しようとするウォルフさんの町での表情が何度も何度もあら  
われた。エスペラントが緑オビング色の霧のサンフランシスコの街の中で、僕はたしかにしく  
りと幸福感に酔っていたのであつた。

(1952年12月14日)





# Historio de Unu Patrino

## el Fabeloj de Andersen

ZAMENHOF 訳  
F.S.G. 訳  
大畑 訳

三訳対照

花園凡太郎

Zamenhof 訳

“Mi havas menion plu por doni!” diris la malĝoja patrino,  
“sed mi iros por vi ĝis la fino de la mondo.”

“Tie mi havas menion por fari...” respondis la virino,  
sed vi povas doni al mi viajn longajn nigrajn harojn;  
vi certe ja mem scias, ke ili estas belaj, kaj ili plaĉas  
al mi. Anstataŭ tio vi ricevos miajn blankajn harojn,  
kaj tio ja ankau io estas!”

“Ĉu vi menion plu postulas?” ŝi diris: “tion mi donos  
al vi kungojo!” kaj ŝi donis al la virino siajn bel-  
ajn nigrajn harojn kaj ricevis anstataŭ tio la neĝ-  
blankajn harojn de la maljunulino.

F. Skeel-Gjörting 訳 —

“Mime posedas ion por fordoni,” diris la malĝoja patri-  
no, “sed mi estas preta, ili por vi ĝis la fino de l’  
mondo.”

“Bone, sed tie mi havas menion por fari,” diris la sar-  
kistino; “donu al mi viajn longajn, nigrajn harpletojn; vi  
mem certe scias, ke ili estas belaj! Rekompence vi ricevos  
miajn blankajn, estas almenaŭ io!”

“Se vi postulas nur tion de mi,” ŝi diris, “mi ĝin fordon-  
as kun ĝojo!” kaj ŝi donis al la sarkistino siajn belajn, nigr-  
ajn harpletojn kaj ricevis interŝange la blankajn de la maljun-  
ulino.

大畑 訳 —

「もうなんにも、あげずものはありません」と悲しみのお母さんは言いました。「けれど、あなたがお母さんなら、世界の果実でも参ります」

その長い髪をく  
が、わたしはほしい  
だって髪はよりはま  
「そのほかにお望  
こうきつてお母さん  
をもらいました。

Zamenhof  
Post tio

en stranga ma  
kloŝoj staris  
peonioj; jen  
duonvelkintaj  
kroj forte all  
kverkoj kaj p  
ĉiu arbo kaj  
vivo, la homa  
lando, sur la  
en malgranda  
kaŭ krevigis  
delikatan flo  
kaj bone vari  
plej malgranda  
la homa koro,

F. Skeel  
Tiam ili i

kaj arboj stra  
kloŝoj, kaj gra  
unuj estis tut  
sur la foltoj,  
kreskis ankaŭ  
plie petroselo  
sian nomon, ĉi

「そんな時に、わたしや何の用もないよ！」と婆さんは言いました。「それよりか、お前さんのその長い黒髪をくればいいぢやないか。自分だってその美しさを知っておいでだろう。それが、わたしはほしいのさ！ そのかわりお前さんには、わたしの白髪をあげるとうしようよ。これだって無いよりはましだよ！」

「そのほかにお望みのものがないなら」とお母さんは言いました。「喜んでさしあげましょう！」こう言ってお母さんは、美しい髪のをやって、そのかわりに、婆さんの髪のような白い髪のをもらいました。

### Zamenhof 訳 —

Post tio ili iris en la grandan florvarmejon de la Morto, kie en stranga maniero kreskis floroj kaj arboj. Jen sub vitraj kloŝoj staris delikataj hiacintoj kaj grandaj arbosimilaj peonioj; jen kreskis akvaj kreskaĵoj, unuj estis freŝaj, aliaj duonvelkintaj, akvaj serpentoj kuŝis sur ili, kaj nigraj kankroj forte alkroĉiĝis al la trunko. Jen staris belegaj palmoj, kverkoj kaj platanoj, jen petroselo kaj florante timiano; ĉiu arbo kaj ĉiu floro havis apartan nomon, ĉiu estis homa vivo, la homo ankoraŭ vivis, unu en Ĥinuĵo, alia en Grenlando, sur la tuta tero ĉirkaŭe. Jen estis grandaj arboj en malgrandaj potoj, tiel ke ili staris kripligitaj kaj preskaŭ krevigis la portojn; sur alia loko oni vidis malgrandan delikatan floron en grasa tero, ĉiuflanke kovritan de musko kaj bone vartatan. La malĝoja patrino klinis sin super la plej malgrandajn kreskaĵojn kaj aŭskultis, kiel en ili batas la homa koro, kaj inter milionoj ŝi rekonis la koron de sia infano.

### F. Skeel-Görling 訳 —

Tiam ili iris en la grandan florejon de la Morto, kie floroj kaj arboj strange interkreskis. Belaj hiacintoj staris sub vitraj kloŝoj, kaj grandaj, fortegaj peonioj; oni vidis akvakreskaĵojn, unuj estis tute freŝaj, aliaj aspektis malsanete; limakoj rampis sur la folioj, kaj nigraj kankroj ĉirkaŭpremis la trunketojn; kreskis ankaŭ belegaj parmarboj, kverkoj kaj platanoj, kaj plie petroselo kaj floranta timiano; ĉiu arbo, ĉiu floro havis sian nomon, ĉiu estis la vivo de iu homo; la homo ankoraŭ estis



vivanta, unue en Floujo, alia en Grenlando, dise en ĉiuj lokoj de la mondo. Troviĝis altaj arboj kreskantaj en kuvoj malgrandaj; ili aspektis tute premitaj kaj estis pretaj por krevigi la kuvon; ankau<sup>em</sup> multe da aliaj lokoj staris malsanaj floretoj en grasa tero, kun musko ĉirkaŭ kaj dorlote flegitaj. Sed la malgaja patrino kliniĝis super ĉiu el la plej malgrandaj kreskaĵoj, kaj ŝi aŭdis, kiel frapas la homa koro interne de ili. Fine, fine, el milionoj da kreskaĵetoj ŝi rekonis la koron de sia infaneto.

### 大畑 訳 —

それから二人は、死神の大きな温室の中へはいりました。そこは地や水が、お互いに入りまじって残っていて、不思議な光景を見せていました。やさしいヒヤシンスが、鐘の形をしたガラスの壺の下で大層に育てられていました。そうかと思つと、こちらには大きな種そうなばたんが立っていました。水草も生えていました。その中には生き生きとしているのもありましたし、半分蒸気になっているのもありました。それは、その上に氷塊がとぐろを巻いていたり、黒いざりがにが壺にしがみついていたりしているからでした。そこにはまた、立派なしげろの木や、かしの木のやすかけの水も立っていました。またおらんだぞりや、花盛りのはやごう草もありました。どの木も、どの木も、それぞれ自分の名前を呼んでいました。その一つ一つは人の命を表わしていました。そして、これらの人達はまだ生きていて、一人は支那に、一人はグリーンランドに、という風に世界中に散らばって住んでいるのでした。大きな水が小さい鉢の中に、驚きそうに立っているのもありました。もう少しで鉢がくだけそうです。また、あちこちには、小さな弱々しい花が、乾いた土に植えられて、まわりを益でつまれ、大層に甘やかされてきました。悲しみのお母さんは、その中でも一番小さい草に、いちいち身をこごめて、その中で人間の心臓が跳を打っている音に耳をかたむけました。こうして、驚きやなくなり、とうとう自分の子供の心臓をききわけました。

### Zamenhof 訳 —

"Ĉi tie ĝi estas!" Si ekknis kaj etendis la manon super malgrandan bluan krokuson, kiu tute velke kliniĝis sur unu flankon. "Ne ektuŝu la floron!" avertis la maljuna virino, "sed stariĝu ĉi tie, kaj kiam la Morto, kiu mi jam delonge atendas alvenos, tiam ne lasu lin elŝiri la kreskaĵon. Minacu al li, ke vi faros tion saman al la aliaj kreskaĵoj, tiam li farigos zorgo. Li estas responde antaŭ Dio, ke sen Lia permeso neniu kreskaĵo estos elŝirita."

F. Skeel  
"Jen ĝi"  
flua kroku  
kaj lace.  
- Ne tuŝi  
ĉi tie, ka  
la kreskaĵo  
tiam ĝi el  
: neniu e  
Dio!"

### 大畑 訳

"これです  
のばしました。そ  
「花にさわ  
つかけ死神が来な  
お前さんの方から  
死神も困んなさる  
も引き扱かないとい

### Zamenhof

Subite t  
kaj la blind  
as.

"Kiel vi  
vi povis alven

### "Mi estas

Kaj la M  
delikata floro,

ojn, tute sup

unue el la t

kaj ŝi sentis  
rma vento, ka

### F. Skeel -

Subite ĝi  
patrino sentis

F. Skzel - Giörling 訳 -

"Jen ĝi estas!" ŝi kriis, etendante la manon super flua krokuseto, kiu tute kurbiĝis kontraŭa tero, malŝanete kaj lace.

"Ne tuŝu la floron!" diris la sarkistino, "sed atendu ĝi tie, kaj kiam la Morto venos, vi zorgu, ke ĝi ne forŝiru la kreskaĵon; minacu ĝin, ke vi forŝiros la aliajn florojn, tiam ĝi ektimos; ĝi havas respondecon antaŭ Dio pri ili; neniu el ili povas esti forŝirata sen la permeso de Dio!"

大畑 訳 -

"これです!" お母さんはこう叫んで、青い花の咲いている小さなサフランの方に手をのびました。その花はずつかり萎えてしまって片方にうなだれていました。

"花にさわつちやいせないよ!" と婆さんは言いました。「そこに立つていなさい。おっけ死神が来なさるじぶんだからね。そうしたら、その草を引き抜かせないようにするんだよ。お前さんの可から、ほかの花にも同じ目に合はせてやるからと、おどかしてごらん。そうすりや、死神も困んなさるだろう! それというのはね、天の神様のお許しがある前は、たとえ草一本でも引き抜かないという聖い約束があるからさ。」

Zamenhof 訳 -

Subite tra la ĉambrego ekflugis glacie malvarma blovo, kaj la blinda patrino povis kompreni, ke la Morto alproksimiĝas.

"Kiel vi povis trovi la vojon ĉi tien?," li demandis, "kiel vi povis alveni pli rapide ol mi?"

"Mi estas patrino!," ŝi respondis.

Kaj la Morto etendis sian longan manon al la malgranda delikata floro, sed ŝi tenis super ĝi, forte ŝirmante, siajn manojn, tute super ĝi kaj tamen plena de timo, ke eble ektuŝos unue el la folietoj. Tiam la Morto ekblovis sur siajn manojn, kaj ŝi sentis, ke lia spiro estas pli malvarma ol la malvarma vento, kaj siaj manoj senforte malleviĝis.

F. Skzel - Giörling 訳 -

Subite glacie vento trablovis la gardenon, kaj la blinda patrino sentis, ke estas la Morto, kiu venas.

"Kiamaniere vi povis trovi la vojon ĉi tien?" ĝi demandis.  
"kiel vi povis alveni pli rapide ol mi?"

"Mi estas patrino!" Ŝi diris. Kaj la Morto etendis sian longan brakon kontraŭ la malsaneta floreto, sed ĝi temis siajn manojn ĉirkaŭ ĝi, tiel firme, kaj tamen zorgante por ne ektuŝi la florojn. Sed la Morto blovis sur siaj manoj, kaj ŝi sentis, ke estas akre, pli akre ol la plej malvarma vento, kaj senforte ŝiaj manoj subfalas.

### 大畑 訳 —

その時、差に氷のような冷たさが、ざあ！と成間を通りました。目の見えないお母さんにも、死神が近づくて来たことが分かりました。

「どうしてお前は、ここに来る道がわかったのか？」と死神はたずねました。「どうして、このおれよりも早く采られたのか？」

「私は母親でございますもの！」とお母さんは言いました。

死神は寒い手を小さいかわい花の方へ伸ばしました。お母さんは自分の両手をしっかりとし、花のまわりに巻きつけて、すき間のないようにかばいました。そして、もしや花びらの一枚にでも死神がさわりはしないかと、それはそれは心配してました。すると、死神はお母さんの手に息を吹きかけました。その息は冷たい風よりも、もっと冷たく、まるで氷のようでした。お母さんの手は、しびれてぐったりと垂れてしまいました。

### Zamenhof 訳 —

"Vi neniam povas fari kontraŭ mi!.. diris la Morto.

"Sed Dio povas!.. Ŝi respondis.

"Mi faras nun tion, kion Li volas!.. diris la Morto.. Mi estas Lia gardenisto. Mi prenas ĉiujn Liajn florojn kaj arbojn kaj transplantas ilin en la grandan ĝardenon de la paradizo, en la mekonatan landon, sed kiel ili tie kreskas kaj kiel tie estas, tion mine havas la rajton diri al vi!..

"Redonu al mi mian infanon!.. diris la patrino kaj ploris kaj petis. Sed subite ŝi ekkaptis per ambaŭ manoj du belajn florojn de sia flanko kaj ekkriis al la Morto: "Mi eĉsinos ĉiujn viajn florojn, ĉar mi estas en malespero!..

F S  
"Vi n  
— "Sed  
"Mi

estas L  
kaj arb  
radizo,  
kaj kio

"Red  
kaj ŝi  
ŝi ekka  
proksim  
ĉiujn

大畑

「わしに  
「けれど  
「その神

語りや。わ  
の大きな花  
がどんどん  
「どうぞ

と、いきなり  
に何って叫び  
かもうもんです

Zam

"Ne e  
malfeliĉa;  
feliĉa!..

"Alia  
la florojn

F.S

"Ne t  
malfeliĉa,  
malfeliĉa)

F. Skeel - Görting 訳 —

"Vi ne povas ion fari kontraŭ mi!" diris la Morto.

"Sed la bona Dio povas!" ŝi respondis.

"Mi nur plenumas Liajn volojn!" diris la Morto. "Mi estas Lia ĝardenisto! Mi premas ĉiujn Liajn florojn kaj arbojn kaj replantas ilin en la ĝardenon de la Paradizo, en la nekonata lando, sed kiel ili tie kreskas kaj kio ili fariĝos, mi ne povas rakonti!"

"Redonu al mi mian infaneton!" diris la patrino, kaj ŝi ploris kaj petegis; sed subite per ĉiu mano ŝi ekkaptis du belajn floretojn, kiuj kreskis en la proksimeco, kaj ŝi kriis al la Morto: "Mi forŝiros ĉiujn viajn florojn, ĉar mia koro malesperas!"

大畑 訳 —

「わたしに何って何をしようかだめだぞ!」と死神は言いました。

「けれども、神様はお出来になります!」とお母さんは言いました。

「その神様の思召を、わたしはしているのぢや!」と死神は言いました。「わたしは神様の庭通りぢや。わたしは、神様の花や木を一つ一つ運んでは、それを誰も知らない国にあるパラダイスの大きな花園に植えかえるのだ。そこでそれ等がどんなに大きくなって茂っているか、またそこでどんな所だが、それをお前に言うわけにはいかないが。」

「どうぞ、私の手帳を返して下さい!」とお母さんは、涙を流して幾度もたのみました。と、いきなり、お母さんは、そばにあった美しい花を両手に一つ一つ摘みました。そして、死神に何って叫びました「あなたの花を、みんな引き抜いてしまいます! もう、どうなったって、かもうもんですか!」

Zamenhof 訳 —

"Ne ektuŝu ilin!" ekkriis la Morto. "Vi diras, ke vi estas malfeliĉa; kaj nun vi alian patrinon volas fari tiel same malfeliĉa!"

"Alian patrinon!.. diris la kompatinda virino tuj ellasis la florojn.

F. Skeel - Görting 訳 —

"Ne tuŝetu ilin!" diris la Morto. "Vi diras, ke vi estas malfeliĉa, kaj nun vi volas, ke alia patrino fariĝu egale malfeliĉa kiel vi!"

"Alia patrino!" Ŝi diris, lasante la florojn en la sama momento.

### 大畑 訳 —

「それにさわることはならん!」と死神は言いました。「お前は、自分の不幸をなげいて  
いるそばから、今また、よその母親をも同じ不幸に落そうとしているのだぞ! ——」

「その母親をですって!」 哀れなお母さんはこう云ったかと思うと、すぐ両方の花をは  
なしてしまいました。

### Zamenhof 訳 —

"Jen mi donas al vi viajn okulojn!" diris la Morto;  
"mi elkaptis ilin el la lago, ili lumis tiel brile. Mi ne  
sciis, ke ili estas viaj. Prenu ilin returne, ili nun estas  
pli klaraj ol antaŭe; rigardu per ili en la profundan puton  
ne malproksime de vi. Mi diras al vi la nomojn de la du  
floroj. Kiujn vi volis elŝiri, kaj vi vidas ilian puton estontecon,  
ilian tutan homan vivon, vi vidas, kion vi volis detrui kaj  
menciigi!"

Kaj ŝi ekrigardis en la puton. Felicega ĝojo plenigis ŝin,  
kiam ŝi vidis, kiel unu el ili farigis beno por la mondo,  
kiam ŝi vidis, kiom multe da felice kaj ĝojo eliros el  
li. Ŝi vidis la vivon de la alia, tie estas ĉeno de zorgoj  
kaj suferoj, mizero kaj malfeliceo.

"Ambaŭ estas la volo de Dio!" diris la Morto.

"Kiu el ili estas la floro de la malfeliceo kaj kiu estas la  
floro de la beno?" Ŝi demandis.

Tion mi ne diras al vi! — diris la Morto, "sed alme-  
naŭ tion sciu, ke unu el tiuj floroj estis la floro de via  
propra infano, ĝi estis la sorto de via infano, kion vi vidis,  
la estonteco de via propra infano."

### F. Skeel-Göbbling 訳 —

"Jen estas viaj okuloj!" diris la Morto, "Mi trovis  
ilin en la lago, ili tiel bele brilis; mi ne sciis, ke  
estas la viaj, reprenu ilin ili estas ankoraŭ pli brilaj ol  
antaŭe. Rigardu nun en la profundan puton tie; mi diras

al vi la  
vidos il  
kion vi  
Ŝi

ĉar ŝi  
al la ma  
on de l'  
Amba

Morto  
Kiu  
tiu de  
Tion

ili estis  
estontec

### 大畑 訳

いあげてきたの  
取りもどすがよ  
い井戸をのぞい  
その花の行末と  
そこでお母

多くの幸福と喜  
は、喜びに満ち  
と不幸ばかりか

### 両方共 「どちが それは喜

いうことは、い  
お前の子供の持

### Zamen Tiam

estis mia  
Liberigu  
portu ĝin!  
lar-mojn, fo

al vi la nomojn de la du floroj, kiujn vi volis forŝiri, kaj vi  
vidos ilian tutan estontecon, iliam homan vivon; vi vidos  
kion vi volis detru!

Ŝi rigardis en la puton, kaj ŝi sentis sincera feliĉon,  
ĉar ŝi vidis, kiel la vivo de unu el ili fariĝas granda beno  
al la mondo; ho! kia feliĉo kaj ĝejo! Kaj ŝi vidis la vivon  
de l' alia; ŝi estas plena je misero, doloro kaj teruro.

"Ambaŭ sortoj estas laŭ la volo de Dio!" diris la  
Morto.

"Kiu el ili estas la floro de l' misero, kaj kiu estas  
tiu de l' feliĉo?" ŝi demandis.

"Tion mi ne diras!" respondis la Morto "sed unu el  
ili estis la floro de via propra infaneto; la sorton, la  
estontecon de via infaneto vi vidis!"

### 大畑 訳

「さあ、このお前の眼を受け取りなさい。」と死神は言いました。「わたしはそれを海からすく  
いあげてきたのだ。たいへんよく光っていたのさ。まさかお前の眼とは知らなんだ。さあ、  
取りもどすまいぞ。前より、すつと明るくなっている。それでもつて、お前のそばにある深  
い井戸をのぞいて見なさい。お前がいま引き抜こうとしたこの二つの花の名を吟んでやるから、  
その花の行末と、その人間の一生とを見るがよいぞ!」

そこでお母さんは井戸の中をのぞいて見ました。そこには、世の中の繁栄のもととなって、  
多くの幸福と豊とを、まわりにひろげている一つの命が見えました。これを見たお母さんの心  
は、喜びに満たされました。今度は、もう一方の命を見ました。そこには悲しみと苦しき、恐れ  
と不幸ばかりが広がっていました。

「両方共神様の恩恵ぢや!」と死神は言いました。

「どちらが不幸の花ですか? どちらが幸福の花なのですか?」とお母さんはたずねました。

「それは言うまい。」と死神は言いました。「だが、そのうちの一つがお前の子供の花だと  
いうことは、いまずぐ分ることだ。お前が見たのは、ほかでもない、お前の子供の運命なのだ。」

### Zamenhof 訳

Tiam la patrujo plena de teruro ekbrilis: "Kiu el ili  
estis mia infano? Diru tion al mi, liberigu la senkulpan!  
Liberigu mian infanon de tiu tuta misero! Prefere for-  
portu ĝin! Portu ĝin en la regnon de Dio! Forgesu miajn  
larmojn, forgesu miajn petojn kaj ĉion, kion mi diris kaj faris!"

"Mi vin ne komprenas!" diris la Morto. "Ĉu vi volas havi returne vian infanon, aŭ ĉu mi iru kun ĝi tien, de kie ne ekzistas reveno?"

Tiam la patrino interplektis siajn manojn, ĵetis sin surgenue kaj preĝis al Dio: "Ne mia, sed via volo fariĝu, ĝi sola estas la plej bona! Ne aŭskultu min! Ne aŭskultu min!"

Kaj ŝi klinis sian kapon sur sian bruston.

Sed la Morto foriris kun ŝia infano en la mekonatan landon.

( LA Fino )

### F. Skeel-Görting 訳 —

Terurigitte la patrino kriis: "Ho, diru, kiu el ambaŭ estis mia infaneto! Forprenu ĝin nur, mi petegas! Ho, konduku ĝin en la regnon de Dio! Forgesu mian ploran, mian doloron, ĉion, kion mi faris kaj diris!"

"Mi ne vin komprenas!" diris la Morto. "Ĉu vi volas, ke via infaneto revenu al vi, aŭ ĉu mi ĝin forprenu kun mi?"

Tiam la patrino kunplektis siajn manojn, kaj genufleksante ŝi preĝis al Dio:

"Ne aŭskultu min, se mi postulis ion, kio estas kontraŭ Via volo! Vi sola estas suprega kaj saĝa! Ne aŭskultu min, ne aŭskultu min!"

Kaj ŝi apogis la vizaĝon sur sia genuo, kaj la Morto kondukis ia infaneton for, for en la mekonatan landon.

### 火畑 訳 —

これを聞いて、お母さんは怒ろしさに思はずびました。「どちらが私の子供なんですか、どうぞ聞かせて下さい。早のない子を助けてやって下さい! あんな不幸な目に会わせないで下さい! 悪い、いつそのこと、つれて行って下さい! 神様のお困りつれて行って下さい! 私の涙なんか忘れてしまってください! 私の願ひも、それから、今まで言ったり、したりしたこと、みんな忘れて下さい!」

「お前の言うことは、わしにはよく分らん!」と死神は言いました。「お前は、自分の子供を返してもらいたいと言うのか、それとも、わしがその子を、お前の知らない遠い国へつれて行ってよいと言うのか?」



お母さんは  
ました。「神  
な! 早  
下下さい  
そして、母  
死神は、

(附記)

この「お母  
三人を  
に余りに多  
と大畑氏の  
がます。大畑  
てAnderse

Ande

Anders

んでいるが、デ  
聞にえる。  
ている。なお、  
水のが正しい。

身に、我輩  
でも知つてゐる大  
言う等ははく  
音されます。

います。ス  
「セツラの理  
です。Siebs  
て示し、新しいス

お母さんは両手をもんで、もがき苦しんでいましたが、やがて膝はずり、神様に祈りをしました。「神様！ あなたのみに心にとましますような私の祈りを、どうぞ、おさき入れ下しますな！ あなたの心こそ、この上ないものでございます！ どうぞ、私のお願いは、おさき入れ下しますな！ おさき入れ下しますな！」

そして、母親は、頭を胸にうずめてしまいました。

死神は、母親の子供を連れて、誰も知らない国へと行ってしまいました。

(おわり)

### (附記)

この「ある母親の物語」については Zamenhof 説と F. de Keel-Gibbling 説と大畑説との三者を掲出して、大畑説自身の klarigo を書くつもりであったのですが、大畑説の身辺が余りに多忙であるため、全然手をつける暇がなかったため、唯だ Z 博士、F. de Keel のエッセイと大畑氏の解説とを掲げるに止まったのは、読者に対して申し訳ない次第です。深くお詫言ひあげます。大畑氏は目下 Andersen の Fabeloj に傾倒していますので、そのうち機会を見て Andersen の他の Fabeloj について書かして頂きたいと思っています。

(1.2, Marto, 1953)

### Andersen の呼び方について

Andersen を普通わが国では、アンデルセンまたはアンダーセン（英語読み）などと呼んでいるが、デンマーク語ではこの d が silento になって、「アンネルセン」というように聞える。そしてこの姓は非常に多いので、必ず H. C. アンネルセン と呼ぶことになっている。なお、旧デンマークは「ダンマルク」、首府コペンハーゲンは「ケベンハウン」と呼ぶのが正しい。と大畑氏は書いておられます。

更に、我輩で有名な外国人の名前の中から、六ヶい発音かものを少し挙げて見ましょう。誰でも知っている大音楽家の Beethoven の読み方は六ヶいようです。Siebs (ジーブス) という学者は (bēthōfan) として表はしていますが、(be; tho; van) とも発音されます。Siebs 氏は Cervantes を (Serwāntes) として表はしますが、スペイン語では v を b のように発音するそうです。「セビラの理髪師」を「セウラの理髪師」と読む人が多いけれども「セビーリヤの理髪師」と読むのが正しいそうです。Siebs 氏は Cervantes の "Don Quichote" を (dō kōiot) とし示し、新しいスペイン語では (don kichote) と発音するそうです。

### 原稿募集

- ◇ JAP. でなら原稿用紙に
- ◇ ESP. でならなるべく羅紙に  
いづれも綴字をはつきり。

- ◇ 締切 4月30日
- ◇ 提出先 小樽市花口町東3の11 山根眼科  
小樽 에스ペラント協会





# Muĝo

HAYASAKA-Motoi.

Vi batalis kontraŭ la maljusta potenco kun  
varmega pasio.

Via sonĝo falis en malluman kaj profundan  
valon kaj tie velkis.

Malgraŭ tio vi kredis, ke homeco estas justa.

Fine vi murmuris "Estas neniam rimedo!"

Ho, kiel nobla kaj ĉagrena lamento estis!

"Adiaŭ!" multaj jaroj forpasis.

Jen venis nia generacio.

Vanajn knabotagojn ni havis.

Sed ni kreskis en la militaluĵkanto.

Ni ne havas eĉ kelkpecojn da eduko.

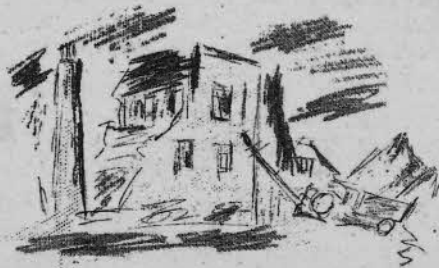
Sed niaj okuloj akre brilas kiel rabbesto.

Ni pentas, rapidas, indignas kaj muĝas.

Ho ve! Ni havas nenian vorton klarigi.

Sed certe venos la tago, kiam poeto

kantos pri ni.



一 透  
と vigla  
kurso 五  
名も  
木  
一 透  
基  
公  
時  
一 透  
を  
rus  
う

## サッポロ だより

—過去— 札幌エスペラント協会の手まりを新しい同志の手でもって vigila なものにしたらということから昨年度、入会院で Esperanta kurso を開き、11名の参加者を得、その中から昨年の kongreso には5名もの参加者があり、その後5〜6名が集まって熱心に読解の研究を続けて来ましたが、現在は冬休みに入っています。

—現在— 今年になって、昨年の受講者の一人で熱心な s-ro 早坂基とアリの協力によって fraŭlinoj のための kurso を南2西25 (月山公園の一ヶ手前の警視庁道で下車) 郵政局建築部二階部長室で毎週土曜日 13時半から開いています。参加者、現在は三名。

—未来— この春、夏、秋にはどしどし pikniko や ekskurso を催して新旧の gesamideanoj の親睦をはかることにつとめ、また, otaruanoj や由木の Yunianoj と合同で Ekskurso を開く計画です。どうぞ御支援をおねがいします。

(desro アリ、エマリ)

Ni dankas vin pro la help-  
mono kaj sinceraj helpvortoj  
al nia eta gazeto "LEONTODO."



s-ro 中沢

S-ro

中沢

100<sup>jenoj</sup>

F-ino

土田

100.

S-ro

下山(徳島)

100.

OTARU ESP-ASOCIETO

2000.

ASOCIANOJ de O.E.A.

300.

S-ro

小林(新潟)

100.

S-ro

里吉(東京)

200.

S-ro

アリマ

130

S-ro

土田

150

S-ro

田中(広島)

280

S-ro

塚原(東京)

200

3660<sup>jenoj</sup>

前, OTARU ESP-ASOCIETO からの

2000jenoj は 27 年度協会会費の剩餘であり付。

# POSTSKRIBO

Y.

オ5号に集まった原稿は実に177篇であった。余白と時間がなくて収容しきれなかったでこのうちの5篇ばかりを次号にまわすことにした。創作は原則としてオミットはしない方針である。その代り、ほとんど添削もしない一なま一の巻のせるから、投稿される方は各自せいぜい悪命に摧殺して出してもらいたい。たとえそれが日本文であろうとスペイン文であろうと、誤字などもなるべくそのまゝに掲載するつもりである。道外の声援者諸君から、内容の空虚、テクニクスの幼稚、誤字、句読点の下手な打ち方(これが逆もむづかしい)など指摘されても編輯者の責任ではない。編輯者はまだ若年でスペイン文の経験もすつと新しいので、集まった原稿に手を入れうる程の器量はまだ無いのである。だから投稿者の不勉強で編輯者が改訂の矢面に立たされるのは不都合であろう。もし、あなたも LEONTODO に好意をもち、この生長を希望してくれているなら、どうぞ遠慮のない卒直な批判をして頂きたい。たとえばスペイン文に文法上の弱やまりが認められたらなくそれが逆も

多い筈と思うが) どうぞ指摘して下さい。それら、出来るだけ具体的に論理的に(理論的!? )書いてくれるのが親切と思う。オ5号は Feb. に出す筈であったのが遅れたのは SHOTAKA-HASHI の原稿が遅れたためである。従つてこれに費用を費したのだが、猶予期間をすぎたので来た原稿がなんと20枚。→



そのために他の5篇ははじめ出された次号で何とも申訳ない。オ6号には更に掲載できる期すつもりである。

新潟の samideano, s+o ASAHIGA-Noboru から、LEONTODO の内容について最近こんなことを云つて来た。

"Tio estas domo, ke ĝi ne enhavis

nuntempan temoj." たしかに、LEONTODO には今日の切実な問題とありげられていない。道外の organoj が一般に東洋、だの、再準備、だのとかがまがすしいのに、LEONTODO の内容はよあやふやという時代錯誤であろう、とほいうものの押しつけがましいことは言いたくない。ただ、今日の問題を LEONTODO 誌上でのべるのはタイマではない、とだけ申しあげておきたい。また、これは北海道一圏と範囲も限らず、道外からの投稿も歓迎したいと思う。

LEONTODO

N-ro 5

1953年 3月 10日 発行 (隔月刊)

発行人 小樽市花園町東3丁目11番地  
山根眼科医院内

小樽 에스ペラント協会

編輯・印刷者 小樽市住ノ江町9丁目8番地

山本昭二郎

会費 75円。(但し、地方の方は郵税8円加算)